

2022年度GTセミナー 第56回保育環境セミナー 空間的環境編④

第283号 2022年8月1日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

空間的環境編④

2022年7月4日～6日に「第56回保育環境セミナー」
(空間的環境編)を開催しました。

オフライン参加は約100名、オンライン参加は60施設を超える
お申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「空間的環境」に
ついて考え方をお示し頂きました。

本誌含め、4回に分けてお送りする最終回です。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)

第56回保育環境セミナー Q&A②

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

今回、オフラインでセミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、ギビングツリー代表の藤森平司先生に考え方を示して頂きました。

目次

[Q. 保育室の装飾は良いと思いますが、それがあつて落ち着かず話が聞けないと言つことはないのでしょうか。](#)

[Society5.0 の実現に向けた教育・人材育成](#)

[Q. 寝る場所や遊ぶ場所が同じになってしまう環境で、空間でのヒントやアイデアがないか考えています。](#)

[Q. 玩具の入れ替え、配置などの環境は、どのようなきっかけで見直しをされていますか？](#)

Q. 保育室の装飾は良いと思いますが、それがあつて落ち着かず、話が聞けない（一対一でも）と言つことはないのでしょうか。また、お集まりで話が聞けない子どもが、聞けないのは 良いのだが、周りの子どもたちを巻き込んで行くので、別の空間に連れて行くなど出来ないときの工夫はあるのか？と言つて聞いてみたいです。

A. 一つは落ち着くと言つて、どう言つるかと言つて、一番落ち着かせるなら、刺激がないことだと思つています。装飾のない真っ白な空間に一人で置いたら落ち着くかですね。それは極端と思つになるかもしれませんが、ある保育園の食事のとき、周りの子が見えると落ち着かないので、1人ずつ食べれるように、全員白い壁を向いて食べれるようにしている園があり、落ち着いているでしょう？とそこの園長が言いました。それをどう思つますかね？私の園では、他の子が食べていることを見させ、きょろきょろしています。それを落ち着かないと言つます。トイレ行くときも、あちこち触るので、全部布で覆つて見えないようにするべきだ、食事も他の子を見ると落ち着かないので、壁を向いて食べさせるべきだと言つていました。私はその時に、「5歳でどつちが落ち着いているのか勝負しましょう」と言つた。私の園では多分、他のどの園よりも年長は静かに話を聞きます。それは周りを遮断して静かにさせているのではなく、物事に集中させて静かにさせています。例えば、抱っこするときに、子どもがキョロキョロして大変だと言つて生み出されたのが、エルゴという抱っこ紐です。赤ちゃんの顔を覆つて、視界を遮断すると落ち着くと言つて、私は反対なのは落ち着くのではなく、脳の刺激をなくして動かないようにしているだけで、子どもはキョロキョロして触つたり、体験することで脳が動いて学んでいく生き物だと思つています。何も無いところで落ち着くと思つていません。散歩へ行くときに当然、行く途中あつちへ行つて、こつちを行つて歩いていくのは当然です。帰りが遅くなると止めるのではなく、それを見込んで行つて帰らないとダメです。そんなもの見ないで怒つてしまいます。行つた先で遊具で遊ばせたいわけではなく、いろいろなものを見ることに意味があることだと思つます。しかし、それがいつでもできるようになると、子どもは自分で今はこれはしてはいけな、とわかつてきます。いくつかあつたのが例えば前にも言つたかもしれませんが、うちにエレベーターがあります。監査の方が、子どもが乗つたら危ないので、スイッチは切つて下さいと言つます。言われた後に私がエレベーターの電源を切つていたら、子どもたちが「何をしているの？」「スイッチを切つているよ、皆が乗つたら危ないから、切つているよ」と言つたら、「だつたら口で言つたらいいじゃん」と言われた。私はそうだねと言つて、今はスイッチは切つていませ

ん。基本的に乗らないです。何でもかんでも遮断して防ぐのではなくてです。私が課題に思っているのが、他律から自律へどうやって行くかということです。私の園では、子どもたちが自分で自分を律することを育てようとしていると、質問に出ていた障がいのお子さんがストレスを起こして、奇声を上げる子に対して、一緒になって騒ぐことはありません。見学の方には説明しましたが、コロナ後だからかわからないが、各クラス一人二人います。うちの子たちで関心するのは、そうなったとたんに無視してくれます。その子が落ち着いたら一緒に普通に遊んでいます。他の園に行くにつられて騒ぐとか、障がいの子がお集まりの時間にブロックをしていると、ずるいと言って自分たちもやるとかを聞くが、私の園ではそんなことないですね。障がいの子がブロックをやっている、ずるいと言わないで、自分たちはそういうことは必要なければ、お集まりに来ますね。自分で律する力をつけることで、園の卒園児が小学校へ行った親たちの評価はどうかですね。他の子たちと違うと言われたのが、不登校の子たちに対しても、たまたま登校すると他の子たちは「大丈夫だった？」というのに対して、うちの園の子たちは普通に接してくれると言っていました。何の差別もなく、普通に接してくれると言っていました。私はよく言うのが、足の不自由の人が車いすで移動する、それはその人にと取って当然の話で、自分も乗せるというのはおかしいですね。障がいの子が、ブロックをしているのは、その子は車いすに乗っているのと同じことで、本来自分たちもさせるのはおかしいですね。そっちにつられるのではなく、自分たちはどうするかを考えられることです。今取り組んでいることが、パニックが起きたら、どうやったら自分を収められるかの訓練を少しずつしています。周りが保育室から離すではなく、パニックになりそうと思ったときに、どう冷ますかの練習をし始めています。学校が全てが学びの場になるようにというように、園内どこにいてもいい。どこに行けば落ち着くかを探してもらおうことをしています。最初はベランダでした。ベランダにいるうさぎに噛まれたら行かなくなって、地下の倉庫に行きはじめました。倉庫には備品があって、行くだけならいいが、紙を破ったりするので他のところはないかと職員室へ行ったり、テントを持ってきてその中で入れるようにしたら、自分で落ち着ける工夫をしています。大きな音でパニックになるので、ヘッドホンを持っていて自分の判断でヘッドホンをつけるようにしています。自分でそのことがわかるようにする。周りの子はそう騒がないで、淡々としていってくれます。落ち着いたら普通に接してくれています。1日2回くらいのパニックを、どう少なくしていくとか、自分の中で処理していけるよう、周りを見守れるような練習をしています。議論しているのが急いでベランダに連れていく先生がいるが、その対応は変だと思っています。本人がパニックになりそうになると、誰もいないと必死に我慢して立ち直ろうとしていたが、先生がちょっと「どうしたの？」と聞くと、急に大声を出して、物を投げて大変なんですね。例に出したのが、ドイツへ行ったときに石の高い山があって、ここに赤ちゃんが登ろうとする。上ろうとしたら、先生たちは一斉に見るのをやめると、赤ちゃんは自分で行けるところまでしか行かないです。見ていると、冒険をしてしまうんです。赤ちゃんは誰も見ていないと思うと、自分で処理できることしかしないです。必死に我慢していることを、声を掛けると泣くことがありますね。これが非認知能力の立ち直る力、失敗してもくじけない力、強靱な精神力が大事といわれているので、ちやほやすることではないですね。まずは危険がないかは判断しないといけませんが、自分で立ち直ることを見守ることも大事で、自分で立ち直れるようになったら、普通学級に行けると思っています。学校では一人ずつのケアが出来ないので、これも先生たちの悩みですね。私の同僚で教員が言っていたのは、障がいの子がクラスに入ると、その子ばかりを見ていて、他の子は自習で終わってしまうというんですね。普通学級に入れるなら、自分で処理できるようにすることですね。昔と違って、障がいの種類が違って、未来の学校の中で、項目でどうしたらいいかが書かれています。学校のすべての場所が学びの場所にしてあげると、一つの指導方法、一つの進路が正しいのではなく、その子のペースを守ることが提案されています。私達は新しい時代になった時に変えないといけないと思います。

—Society5.0 の実現に向けた教育・人材育成—

どんなふうに学校が変わるかという、国から転換期が来ています。昔は、決まったことに疑問を持たず、自分で一人で既存の枠組みの中で考えていたことが、現状に疑問を持ち、他者と共同しながら考えるこういう時代になる。特定の唯一答を見つけようとしたり、AかBかではなく、どちらかはこれからの時代言えない。環境にも、経済にも折り合いをつけながらのように、合理的なことを見つけ出すこと言われています。人材の育成の在り方でも昔は同質性、均一性、一斉授業をして形式的な平等といていた。そのために評価は測りやすい力として限られた時間で、記憶や思考を解く力を評価した。学校の種類や縦割り教育、例えば女子が理系に行っても、というバイアスを止めましょう。これからは多様性を重視した教育で、共同的な学びだったが、自らの学びを調整して試行錯誤しながら課題に立ち向かう探究力、答えではなくて、どうやって取り組もうとしているかを評価しましょう。学校や学級だったものを、共同体で一人ひとりの特性を伸ばす。大人の成功体験にとらわれず、子どもの好奇心や個人の興味関心に応じた学びや進路の実現をさせましょう。ということです。今までは、教師による一斉授業が主体でした。これからは子どもの理解度や認知の特性に応じて学ぶ。そうすると学校・学年の考え方が変わります。これまでは、同一学年で構成され2年生は2年生の学びをしていたが、先をやったり学年を遡ってやったりそういう学びをしましょう。その子が何を学ぶか。2年生でも3年生に行ったりする。場所、空間も同じ教室で集団行動が基本の教室。これからは、教室以外の選択。教室以外の場所でも過ごせるようにしましょう。これまでは教科担任だったものを、教科を超えた実社会に即した生きる学びをする。教師はこれまでティーチング、指導書通り計画を立てて教えていた。これからは子どもの主体の学びの伴奏者、コーチングをなささい。もう指導計画を立ててすることはやめましょう。組織としては、教員養成課程を出た人が定年まで勤めるということはやめて、色々なキャリアを持った多様な教職員集団それぞれの専門性を生かした共同体。イノベーション会議とって、一番の座長は内閣総理大臣で各省庁の大臣、科学庁長官が集まり、これからの日本の教育をどうしようかというトップ会議で決まったことです。その最終報告です。これが今後具体化していきます。私たちは発想を変えないといけません。最後のところで教育委員会学校の先生にこういうメッセージを書いています。学びは大きな転換期にあります。子どもたちの学びの意欲を引き出し、好きな気持ちを諦めさせない気持ちは、明治以来の150年の学校教育が求めてきたものですが、社会構造の変化の中の学びの転換は、これまでの蓄積を形にする大きなチャンス。パッケージを推進することによって、国として最大限学校現場を支えていきます。先生方自身も新たな学びに向けて、子どもたちと向き合って頂きたいと切に願っています。保護者には、これらの施策は、大人の頭の中にあるかつて、自分が受けてきた教育と異なるため、それが一つ一つ実現されていくにつれ、不安や違和感が生じるかもしれません。例えば、歴史の学び一つとっても、一方的な事実を教えるものから、「なぜ源頼朝は鎌倉に幕府を開いたのか」ということを自分事として考え、歴史を因果関係でとらえるというような、次代を切り拓く力を育むことが求められています。新たな学びに挑戦する、学校や子どもたちへのご理解・ご協力をよろしくお願いします。保護者に自分が受けてきた教育と変わるから不安に思うかもしれない。だけど、時代が変わってきたので変わろうとする教育に理解をしてほしいということを行っています。コロナが終わったポストコロナで出されているメッセージです。変わるチャンスです。最初に言った率先して、具体的な方法を示していくこと。私達が進めてきた保育に近づいています。ですから私たちから発信していく。学校が目指しているものと同じになってきます。今こそ、教育が大展開期に遭遇している。新しい時代が来るんですね。私たちが新しい時代を作っていく。これまでがこうだったではなく、今何をしていったらいいかを考えてほしいと思います。

Q.現在の0、1、2歳児クラスで保育室が1フロアです。食事のスペースは分けられていますが、遊ぶ場所と寝る場所が同じ場所で少し落ち着かない環境です。構造状しようがないものではありませんが、どうしても寝る場所や遊ぶ場所が同じになってしまう環境で、空間でのヒントやアイデアがないか考えています。

A.うちの園で言うと、2歳の部屋は遊ぶ場所と寝る場所が同じなので、食べている間に遊ぶ間を片しています。だからと言って落ち着かないわけではないが、うちの園が広く見えるのは廊下、ホールがありません。運動遊びをする場所はあるが、行事をするためのホールはありません。その辺も、どのような保育室に想定できるかを考えるのが一つです。ホールや廊下をどんなゾーン、役割をするかもあります。もともと、155定員だったのが1.5倍になり、117名になり多くなりました。そうすると、お昼寝の場所はどうするかになる。もう一度、生活の見直しから行い、小さいうちから寝ることを見直した結果、寝る子どもたちはそのスペースで大丈夫になった。全員寝かしていたら、足りないが希望者なら足りる。実際に年齢に関係なく、幼稚園は基本的にこども園になっても寝ないですね。寝なで全然済んでいますので、全員寝かせなきゃと思うこともなくて、うち園ではプールの時は寝る場所が足りなくなるくらい寝ますね。疲れるのでしょうか。まず寝る子どもたちを想定すれば、寝る場所と遊ぶ場所を兼用しても、全部寝なくても半分くらい使えば済むこともありえますよね。継続して遊ぶ場所も、半分くらいとっておけるかもしれない。ホールなどで寝るようにするとか、他の場所で寝れる場所はないとか、見ていくといいと思います。そのために見直す一つが、全員寝かせる必要があるか。ホールや廊下など使える場所がないかを見直していくことだと思います。小さいうちは全員寝かしつけることは必要かもしれませんが、あとは順に起きていくかもしれません。実際に見てみないとわかりませんが、どの場所は残して、どうするかなど時間で追っていくといいかもしれません。

Q.玩具の入れ替え、配置などの環境をあまり変えていないとお話がありましたが、どのようなきっかけで見直しをされていますか？私達の園では、玩具が飽きてきたところで（1.2ヶ月程度で）入れ替えを行なっています。

A.新しいおもちゃは基本的にサンタさんが持ってきてくれます。12月に新しいおもちゃが入ります。自分で片づけたり、自分で遊ぶためには、どれくらい時間がかかるか分からないと出来ないのので4月、5月に出すとひっちゃかめっちゃかになる可能性があるのので、年度が始まった当初は遊びなれているもので遊びます。それが落ち着き始めた年度終わりの12月頃、新しいおもちゃに入れ替えたりします。形としてはサンタさんが持ってきて下ろします。置いてあるもの、場所は全体の合意のもと行います。先生を呼んで、プレゼンをしてこう換えたいと意見を聞いて、みんなの賛成で換えますので、4月になって換えることはありません。昔は担任によって、がらっと部屋の模様替えをしていましたが、みんなの合意のもと換えているので、今は3月末4月の最初は何の変化もありません。1月に担任を発表して、次の年を想定して移行します。3月になって卒園式を割と早めにとすると、卒園式が終わると同時に担任発表を保護者にして、新しいクラスに移行をし始めます。年長さんは部屋がなくなり、廊下に荷物を置き始めます。モノを入れ替えたり、写真の張替えをしたりして、3月中にしてしまうので3月末と4月初は何も仕事がないです。4月5月と過ごすのは、新入園児に落ち着くように力を注ぎます。それには、在園児が力を発揮してくれます。落ち着いたところに、新しい年度の子どもの色が出てきます。電車が好きな子がいると、どうも今年はこうと言って、5、6月頃になると、その年度によってゾーンを変化させていきます。少しマイナーチェンジをして、どこを大きくするかなどをしていきます。それから、中身の入れ替えは飽きるかどうかはわかりませんが、子どもが集中していないとかなると、実際やっているかわかりませんが、例えば絵本のアンケートを取るとか、絵本をたくさん読む子をうちの園では、絵本マイスターと言って、読む子たちを本屋に連れて行って買って帰るとかします。これは、ドイツなどでは参画と言って、子どもから提案してきたものを買うことをします。そういうようなことをして、どういうものに興

味を持っているかということでもあります。入れ替えをすることはありますが、ゾーンを変えることはしません。入れ替えは何回か先生たちのタイミングで行います。新しいおもちゃは12月、入れ替えは3月中に行い、落ち着いてきたら6月頃にマイナーチェンジをする。ゾーンの場所は変わらないけど、子どもたちの様子を見て変えていきます。そういう環境を変えることをしています。

本稿は、2022年7月5日に開催した「第56回保育環境セミナー」の「Q&A」の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)